

“藝文志”派文学と“満洲文壇”

李

青

中国では、東北淪陷期文学についての研究はまだ日が浅い。東北が淪陥してから、関内に脱出した簫紅や簫軍のような東北出身の作家は、上海などを抗日の拠点として、盛んな文筆活動をおこなった。もちろん、文学史上において高い評価が下されている。ところが、「満洲国」に居残った文人に対する評価はと言えば、まったくと言っていいほど逆である。それは、その後の時代背景の複雑さと政治的要因により、長年にわたり「満洲国」の文学の実態は解明されることがなかったからである。

とりわけ、「満洲国」時代に文学業績のもっとも多い、統治者の日本人とも親密な関係にあった“藝文志”派の文学については、「漢奸文人」と「漢奸文学」といったきまり文句が繰り返されるだけだった。誰一人としてかれらの業績を正面からとりあげようとする、勇気ある研究者はいなかった。

中国大陆では淪陷期における文学や歴史に対する再評価は、80年代になって動き出した。以来、質の高い研究書が何冊も上梓された。本論では、『手かせ足かせをはめられたミューズ—東北淪陷期文学史概要』（劉中樹主編、孫中田・逢増玉・黄万華・劉愛華著、吉林大学出版社・1998年）の一節「“藝文志”派文学の様相」（102頁～182頁）に提示された諸問題を手がかりにして、“藝文志”派と“満洲文壇”および日本文人との関わりを探ってみたい。

なお、『手かせ足かせをはめられたミューズ—東北淪陷期文学史概要』は、以下、『東北淪陷期文学史概要』と略称する。

『東北淪陷期文学史概要』は、東北淪陷期文学の最新の成果である。本書は、大量の中国語資料を駆使し、当時の“満洲文壇”における様相、特に中国人作家の創作活動に重点を置き、論述されている。これまでの研究書と比較したとき、より実状に迫る力作だと言える。東北淪陷期文学の研究におい

て、得難い研究書であることは間違いない。

「“藝文志”派文学の様相」は、次の六つのテーマからなっている。

- 一．“写印主義”の提唱（「写印」とは多く書き、多く印刷すること）
- 二．多元的な芸術探索
- 三．古丁の創作活動における“一人歩き”の哲学
- 四．“鬼才”爵青の悲哀
- 五．純粋な芸術美を求める小松
- 六．東北の郷土文学の短編大家疑滞

著者はまず、“藝文志”派の文筆活動における全体像の複雑さ、多元性を強調する。「要するに“藝文志”派の芸術におけるさまざまな探索は、淪陷区という政治的にも精神生活的にも激しく変化を余儀なくされた環境のもとで、自分の感情と見解を表すことばかりでなく、一般読者にも受容してもらえる文学形式をめぐる、努力してきた。」このほかに、“藝文志”派主要メンバーの創作についても、鋭い分析をしている。著者は、「全面的に“藝文志”派の特質および東北淪陷区における文学的位置づけを明らかにするには、当派の主要メンバーの作品を読みこまないとはいけない」と、“藝文志”派に所属している作家に対する研究の重要性を訴えている。

建国後に、政治情勢が常に文学創作活動の方向性を左右していた。文学史研究も例外ではなかった。淪陷区内にとどまり、文筆活動をしていた作家に対する評価は、長年「漢奸」の一点張りであった。彼らの作品を読むことすら禁じられていた。

文化大革命の収束に伴って、淪陷区文学を再評価する声も徐々に高まってきた。当時の貴重な資料が大量に発掘されたことは、研究に朗報をもたらした。80年代末から、90年代末にかけて、東北地方の学者を中心に数冊の研究書が出された。しかし、古丁を代表とする“藝文志”派同人に対する評価と再認識には時間がかかった。当派の大部分は“政府”の役人であり、経済的に日本人の援助を受けていた。雑誌や本の出版も“合法的”なルートを持っていた。

この十数年来の研究成果をまとめておくと、“藝文志”派およびその同人に対する評価は少しずつ変化が見られるようになった。しだいに、客観的叙述がなされるようになってきたことがわかった。以下、代表的な学術書から、

その論点をあげてみよう。

まず、1989年に東北現代文学史編写組によって、『東北現代文学史』（瀋陽出版社）が出版された。第七章の第二節に「漢奸文学」（29頁～132頁）がある。偽政府の要職につく文人を「老漢奸」として指摘したほか、「日本と偽満洲政府統治の後期に一部意志の弱い作家は日本と偽満洲政府の指示に従い、反動的な国策に迎合する漢奸文学を作り出した」と。どちらも「民族利益を害した」と批判している。さらに、漢奸文学の内容は三つの側面から論じられている。

第一に「日本と偽傀儡政権を粉飾、美化し、王道楽土を讃え、日本のファシスト強盗を賛美した」こと。名指しで雑誌『藝文志』（1944年7月第9号）に刊行された『西南紀行』は日本と偽満洲国政府に賛美歌を送るものであると厳しく非難した。小松作の『見聞二三』を例として、「根っからの漢奸文学」と結論づけた。

第二に、「ファシストの侵略戦争を讃え、侵略戦争に犬馬の労を尽くした」こと。この中で疑遲をはじめとする同人の具体的な作品を名指ししながら、批判している。

第三に、「中国人民の抗日戦争や中国共産党と東北抗日連合軍を攻撃した」こと。

以上から分かるように、作者は“藝文志”派の文学創作は単なる侵略戦争の道具にすぎなかったと見ている。全体にわたってみても“藝文志”派にむけられた目が厳しい。

さらに、もう一点注意すべきことがある。著者は張毓茂氏、馮為群氏、李春燕氏など、東北淪陷期文学史研究の重鎮ばかりである。権威の見方は普遍的な定説となる。政治的な影が依然として学術界に投影されていることは明白である。

二年後の1991年、『東北淪陷時期文学新論』（吉林大学出版社 馮為群、李春燕著以下『新論』と略す一筆者）と『東北淪陷時期文学史論』（北方出版社 申殿和、黄万華著 以下『史論』と略す一筆者）が相次いで出版された。

『新論』の著者は、先に述べた『東北現代文学史』の編纂に参加していた。二年後の『新論』の論点は、今までの全面的な否定から、肯定に転じるものだった。

『新論』には「古丁について」という一節が設けられている。古丁を中心とした“藝文志”派文学もふくめ、以下のような新しい見解がしめされている。「古丁などは、日本と偽満洲政府に身を寄せた作家ではないと思う。というのは、われわれが八年かけて収集した何百万字の東北淪陥期の資料から見ても、古丁が敵に身を投じ、変節したという形跡、または愛国的、進歩的な作家を裏切ったという事実はまったく見られないからだ。逆に、少なからずの資料から、特にかれの文学創作の全体像を見ればわかるように、かれも愛国の抗日作家なのである。(中略)当然、古丁は日本に接近する際に、日本を賛美する言葉や行動があったのも事実である。しかし、あのような時代・社会と環境においては、やむをえないことである。それを理解してあげるべきである。」(226頁～227頁)『新論』は新たに発掘した資料を根拠に、古丁や“藝文志”派を積極的に評価したのである。

同年に出版された『史論』は、『新論』よりさらに一步ふみこんだ形で、“藝文志”派とその代表作家たちに肯定的評価を下している。“藝文志”派のメンバーは、外来文学を鏡としながら、民族文化を固持することによって、“藝文志”派作品に独特な性格を形成した。題材として、現実の旧社会の暗黒、腐敗を描いたものがもっとも多い。この隠喩の手法は“藝文志”派における芸術表現の特色である。『史論』では、六つの部分から、“藝文志”派を分析している。

この二編の著書からわかるように、今まで“藝文志”派に批判的な態度だった研究者、「禁区」に足をふみいれようとしなかった研究者も“藝文志”派に対して、客観的な分析姿勢をとるようになった。これを皮切りとして、研究書が相次いで上梓されたのである。

例をあげれば、『中国抗戦時期淪陥区文学史』(徐迺翔・黄万華著、福建人民出版社・1995年)、『東北現代文学史論』(張毓茂主編、瀋陽出版社・1996年)、『東北文学総論』(李春燕主編、吉林文史出版社・1997年)、『東北文学史論』(李春燕主編、吉林文史出版社・1998年)などがある。

上記の研究書は、いずれも“藝文志”派の文学創作を肯定的に評価している。歴史の狭間に埋もれていた「満洲国」の文学が、ついに日の目を見る日がやってきた。こうして、90年代の“藝文志”派文学に対する見直しによって、中国の学术界は本格的に東北淪陥区内の文学研究に着手したのであった。

十数年来の研究成果は単著のほかに、シリーズものもある。『東北現代文学大系』全十四巻（張毓茂主編 瀋陽出版社 1996年）と『中国淪陷区文学大系』全七巻（錢理群主編 広西教育出版社 1998年）はそれである。

“藝文志”派文学についての研究は多くの成果を収めたものの、当時の社会環境や時代背景を鑑み、依然ベールに包まれた部分がある。これを解明するには、中国語による資料は無論大事であるが、かれらと日本人との深いかかわりなどの諸事象も無視することができない。ゆえに日本語による資料を発掘する作業も必要である。次の段落から日本語の資料を使用しながら、“藝文志”派と日本人とのかかわりを見てみたい。

まず、翻訳家・評論家の大内隆雄という人物に注目したい。かれは東北淪陷時期にもっとも活躍していた日本人の一人である。「満洲文学」を語るには欠かすことのできない存在である。かれは精力的に多くの中国人作家の作品を日本語に翻訳し、日本本土に紹介した。「満洲国」時代に彼は日本浪蕤派のメンバーとして日本人の文学組織で活躍していた。中国語と中国文学にも造詣が深かった。彼の翻訳によって、日本をはじめ、「満洲国」以外の人々の東北淪陷区文学を理解するに、多大な貢献をなした。

山口猛氏は『哀愁の満洲映画』の中で、大内隆雄に触れた箇所がある^①。

満州での中国人の文学者に対する積極的活動を行ったのは、著名な満洲文学の紹介者、翻訳である大内隆雄、本名山口慎一である。（中略）山口慎一、明治40年、福岡県柳川生まれ。大正10年叔父の住んでいた長春に移り長春商業学校に編入し短編小説を書き注目を集める。大正14年卒業、同年、満鉄の派遣留学生として上海東亜同文学院に入学した。この上海時代には長編小説「北方の街にて」が満州日日新聞次席当選し、さらに中国の革命運動に共鳴し、田漢、歐陽予倩、郁達夫などとの交遊があった。また、昭和四年には早くも魯迅の「阿Q正伝」について触れた評論を書いている。昭和4年に優秀で卒業、革命と白色テロの血なまぐさい上海から大連に戻り、満鉄弘報課に勤務する。満鉄社員として調査研究する傍ら評論活動を続けたが、折りから起こった柳条湖事件に対しては、五族協和による満州建国の理想主義と、上海時代の左翼文学者、中国共産党への共感が矛盾することなく受け入れていた。

上記の記述からみれば、大内隆雄の「満洲」における文学創作と翻訳活動は上海時代の貴重な体験と関係していると思われる。上海時代で左翼作家との接触や中国革命に対する理解があったからこそ、のちに大量な中国人作家の作品の翻訳ができたのである。

大内隆雄の翻訳活動に対して、東北淪陷区老作家の山丁や研究者の岡田英樹氏はいずれも評価している。山丁は淪陷時期に書いた長編小説『緑色の谷』（長春文化社 1943年）を再版する（春風出版社 1986年）際に、当時、発売直後に、“反満抗日”^②の疑いのある文句を一部削除処分を受けたことについて、こう書いている。

日本語訳のほうは削除をされなかった。訳者は原文に比較的忠実で、作者に迫害を加える形跡もなかった。もしも、かれが翻訳時に上記の文字（削除された部分を指す。筆者注。）から、作者が故意に“日満親善”が略奪とか、農民に畑を放棄するように煽動しているなどを口実に、作者に“反満抗日”のレッテルを貼れば、作者の運命はどうなるか想像しがたかった。

大内隆雄が翻訳した山丁の『原野』（三和書房 1939年9月）で、多くの日本人ははじめて「満洲国」中国系作家の存在を知ることになった。日本人が中国人作家に注目するようになったのも、『原野』の日本語版が紹介された時点からである。

評論家で海外植民地文学の専門家尾崎秀樹は、「満洲文学」の構図をこうまとめている。^③

「満洲国」における文学の姿は、『作文』派と『満洲浪蕩』グループの併立に、『藝文志』に拠る中国系作家と、大陸開拓文芸懇談会に代表される日本の文学者たちを加えることで、一応の図式を完成することになる。

大内隆雄の翻訳に“藝文志”派の作品が圧倒的に多い。無論、“文選”派作家の作品もある。「作品の選定は非常に適切だ。しかも、訳語は正確だ」と評する専門家がいる。大内隆雄の紹介を通じて、少なからずの日本文化人は“藝文志”派に注目するようになった。大内隆雄が選んで翻訳した“藝文志”の作品を全般にわたってみると、旧家族制度への批判を取り上げた作品が多い。この問題について、大内隆雄自身はこう解釈をしている。^④

もう一つ考へられることはこの問題については割合自由な筆が揮へるといふ事情も作用してゐるであろう。他の問題だと旧いものへの反逆といふことにつひ面倒なことが生じ易いのである。うるさいことになるのである。先づ比較的無難な家族制度の問題の中で、進歩的な青年たちが批判、反抗の気炎をあげてるといふやうな事情——それをも考へて作品を読まねばなるまい。

“藝文志”派をとりまく悪環境、および自由に題材を選べない政治的な要素があると示唆している。

なお、評論家・小説家の浅見淵は、古丁の『原野』を読んでこう感想を記している。「満州国建国とともに押寄せて来た新しい文明のために、いまや将に亡びなるとしている古い文化を、古丁は、つまり、むしろ亡び去ることを賛成しながら辛辣に写しだしているのだ。スケールも大きく、作中人物も類型的で粗雑ながらそれぞれ描き分けられ、読みごたえのある作品である。何よりも満州国の中産階級の満人氣質といったものや、風俗習慣といったものが執拗に描かれていて、それらがわれわれの興味を惹く。」

『東北淪陷区文学史綱』（116頁～117頁）の評論も透徹している。

旧家族制度を“暗黒”の世界として攻撃の目標になっている。同時に、紆余曲折した手法を使ったり、局部の描写において、ある程度の現実に対する不満を暗喩しているのは、“藝文志”派が旧家族制度という主題を描く主な側面である。

大内隆雄が翻訳出版した「満洲国」における中国人作家の作品を総合的にみれば、共通の特徴が見られる。それは“暗い”ということである。かれらは封建制度や生活環境の暗黒を描く。どの作品からも「満洲国」で生活している中国人社会の環境が、息苦しいとすることができる。

「彼らの作品はいずれも昏い。封建的な遺制、生活環境のくらさばかりでなく、満人社会をとりまく状況のすべてが閉ざされている。彼らは塞外にとどまるかぎり、つねに偽国家『満洲国』の貪欲な野心と対決しなければならない。そうして中産階級からの転落は目に見えており、生活保身のためには『面従腹背』の道しかない。しかも、彼らは祖先の土地をはなれようとはしないのだ」と尾崎秀樹はこう見ていた。

自分の生まれ育ったこの故郷を愛しているからこそ、表では隠喩の手法で

心中の苦悶を表すしかなかった。これは“藝文志”派が『明々』（1937年8月）を創刊する時点から『藝文志』（1939年6月）の刊行まで、かれらの作品は始終憂鬱の色彩が濃かったのである。社会の暗さを日本と偽満洲国政府の統治にあるとまでははっきり指摘しないものの、かれらの作品と雑文などを通じて、提示した問題は考えさせられるものが多かった。尾崎秀樹は東北淪陷期の中国作家の精神構造を分析する際、こう言っている。

「かれ（古丁を指す。筆者注）の批判の刃は、そのままかれ自身の内部に食いこみ、そこで被虐的な対話をくりかえす。かれの作風がしめすシニカルな歪みや、ユーモラスな味わいも、それとの激しいきしみのなかから生み出されたと言えよう。この傾向は、古丁に限ったことではなく、中国系作家の共通した精神構造でもあった。」^⑦

前述したように、古丁と“藝文志”派同人の、雑誌『明明』から、『藝文志』までの文学活動は、いずれも日本人の支持と援助を受け、満洲国政府とのかかわりが深かったのである。古丁をよく知る日本文人の回想、および古丁自身の言論からみれば、古丁とかれの同人たちは、満洲国政府が企画した会合や雑談会に駆りだされ、つきあわされていたこともあった。これは事実である。しかしながら、日本の文人とのかかわりをもった場合は必ずしも対等の立場でものを言うことはできないのである。文化人の一人王則は、日本から視察に来た文化人たちの横柄な態度を次のように述べている。「やって来ては、茶菓子も取る。会談をやる、会談の内容は言葉が通ぜぬため一人二人の外国語をあやつる者が満洲文学の近況といったものを述べるだけで、あとは『視察』を行った作家が先輩らしく感想を述べ指示する。そして『歎をつくして散会』する。」^⑧あくまでも、交流をすると言っても、日本文人は「満洲国」の中国系作家に対して、「指示」する立場にあった。かれらの顔にあらわれた統治者としての優越感は、誰もが感じただろう。このような「視察」に反感を覚えると同時に、暗に「無意味」だと考えている。植民地という苦界に身を沈めている社会では“交流”とか“座談会”のような会合に“平等”を求めることは、到底不可能なことだろう。

このほかに、岡田英樹氏が新刊自著の『文学にみる「満洲国」の位相』（研文出版 2000年）で当時「満洲国」国務院総務庁統計処統計科につとめていた内海庫一郎が古丁への回想を紹介している。内海庫一郎は古丁と同じ職

場の同僚であり、つくえも並べていたという仲だったとのことである。次の発言から古丁の内心世界を垣間見ることができる。

「私が物どころついてから、国家が三度変り、紙幣が五回変りました。ちょうどルーブル・インフレーションの時でした。おやじが商売で大儲けをして、トランク一杯のルーブル紙幣をためこんで、我々子供達に『これだけあれば、お前たちが一生遊んでくらせる』と言ったんです。それが半年たつたたぬうちにみんな紙屑になっちゃって子供のオモチャになりました。内海さん、今のこのお金——といって机の上にあった満州国中央銀行券を指さして——もう直きルーブルと同じになりますよ。——中国には昔しから“小乱のときは街にひそめ、大乱のときは村に行け”という諺がありますが、今度起こるのは大乱でしょうから私も村へ行く準備をしていますよ。」私はこれが親日派中国文人ナンバー・ワンとして知られている人間が内心で考えていることか、^⑨ と思い日本の暗い前途を思った。

古丁と交際のあった小説家・評論家の浅見淵や北村謙三郎なども戦後の著作で古丁を回想している。公の場でまったく見られない古丁のもう一つの姿を紹介した。

『東北淪陷区文学史概要』にある「藝文志派文学の風貌」（102頁～172頁）では、「満州国」後期の“藝文志”派について、「少数の作品は明らかに“国策”文学の色彩に染められた」としながら、また、こう断言している。

「一．藝文志派の大多数の作品は“国策”文学の範疇に入らない。（中略）二．日本と偽満洲国当局の文化政策のもとで、藝文志メンバーたちはある程度“面従腹背”の一面をもっている。特に古丁の雑文集『譚』が、1942年に出版されてから、その激しい民族意識の表現は文壇の注目を集めた。面従腹背の行為によって、藝文志派のメンバーは魂と肉体の受難を体験した。古丁は自分が“ひどく悲しんでいる”，“ひどく孤独”だと言っている。爵青が“息苦しい”，“救えない”と自分の心境を訴えている。これらは“藝文志”派がいかに精神的に困境に陥っているかがわかる」（111頁～112頁）。さらに，“藝文志”派の主要メンバーである古丁，爵青，小松，疑遲の文学について、こうまとめている。「“藝文志”派の創作活動は、東北で活躍していた日本文化人と密接な関係を持っている。（中略）“藝文志”派の創作思想も多くその

影響を受けている。これは日満官製文化政策における東北淪陷区での破綻を認識するには価値がある」(182頁)。

近年、資料の充実が新しい発見をもたらしてくれている。特に「満洲国」内で始終文筆活動に従事してきた古丁をはじめとする“藝文志”派の本来の姿が日に日にはっきりと見えてきた。かれらの内心世界から芸術世界まで、新たな認識ができるはずだろう。これは「満洲国」全体の文学状況を理解するには欠かすことのできない。

注

- ① 山口猛『哀愁の満州映画』三天書房 2000年3月 95頁。
- ② 陳荒煤主編『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社 1996年4月 203頁。
- ③ 尾崎秀樹『近代文学の傷痕—旧植民地文学論』岩波書店 1991年6月 230頁。
- ④ 岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版 2000年3月 228頁。
- ⑤ 注②と同じ。250頁。
- ⑥ 注②と同じ。248～249頁。
- ⑦ 注②と同じ。251頁。
- ⑧ 注②と同じ。237頁。
- ⑨ 注④と同じ。259頁。

(大谷大学助教授)